OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フロイトの子ども論 : 子どもの科学と思想の歴史
Author(s)	渋谷, 亮
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26239
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕フロイトの子ども論――子どもの科学と思想の歴史

学位申請者　　渋谷　亮

本論では、「フロイトにとっての子どもとは何だったのか」という問いを探究した。それは、「子どもの科学」が形成され、「治療主義的な権力」が広がりはじめた時代にあって、フロイトの試みがいかなる役割を担い、そしてまたいかなる射程を有しているのかを検討する試みであると言えよう。その際に私たちが出発点に据えたのは、次の二点であった。第一にフロイトにおける子どもが、子ども、幼児期、幼児性の絡まり合いであり、子どもの問題は精神分析という営みの可能性それ自体と関わっているのではないかということ、第二にフロイトの試みが科学を志向すると同時に、非科学的なものを絶えず内部に取り込むことによって成立するものであるということである。それゆえ、科学史と思想史双方の方法論を用いて、科学と思想の境界域において精神分析とは何かを問うことによって、フロイトにおける子どもの姿を描きだすことが本稿の課題であった。

第一部では、精神分析の成立過程を催眠術と精神分析の関係という観点から描きなおすことが目指された。そこで私たちが課題としたのは、第一に精神分析がいかなる科学として成立したのかを明らかにすること、第二にフロイトがいかにして子どもと幼児期という主題を導入し、これに重要な位置づけを与えていったのかを示すことであった。その際に私たちは、催眠術と精神分析の関係を、発展的な歴史における乗り越えとして捉えることなく、むしろ催眠術の回帰を問題とし、そしてまた合理性の産出それ自体を問題とする分析を行おうとした。そのために、装置の系譜学という観点からの検討を試みた。

第1章で見たように、催眠術の歴史は、実験科学の装置とメスメル主義の装置の緊張関係という観点から描きだすことができる。そこで描きだされたのは、種々の配置換えのなかで、実験的観察（シャルコー）と治療主義（ベルネーム）が、あるいは透明な観察主体としての医師と輝かしい身体としての医師が、緊張関係を持ちながら交差する過程である。これを検討する作業によって、19世紀末に人間を対象とする科学の内に、ヒステリーと催眠術の問題を介して、人や物を結びつける力として接触、想像力、模倣の力動、すなわち一種の想像力が侵入してくるのを確認した。

第2章では、フロイトが、シャルコーとベルネームのあいだで、あるいは実験科学の装置と治療主義の装置のあいだで、自らの方法を練り上げていく過程を検討した。それは、接触、想像力、模倣といった想像力の問題と取り組み、そこから身を振りほどくことで、自らの足場を作る試みであった。そこでフロイトが導入したのが、表象の連鎖である。とはいえ彼は、表象の連鎖と想像力のあいだで、どちらにも還元しえない仕方で精神分析を構想したと言える。そこでフロイトが拠り所としたのが、表象の連鎖の手前の水準で作動する装置、ないしイメージと言語のあいだで作動する装置であり、そしてまた分析家と被分析者との関係において束の間立ち上がる幼児期であった。フロイトはこのような幼児期をもとにして、子ども、幼児期、またはその発達を描きだしていったのである。

第二部では、第一部の議論を踏まえた上で、フロイトの子どもや幼児期、発達に関する議論を、当時の科学的な試みとの関係において検討していくことを課題とした。そこでの私たちの目的は、フロイトにおける子どもの両義性を示すことであった。すなわちそれは、一方で知と権力の結びつきにおいて作動する「治療主義的な権力」の戦略的な中継地点でありながら、他方で、それに還元できない側面を持つということである。特に第3章では、催眠術とともに当時の心理学、精神医学で盛んに議論された主題の一つであったセクシュアリティの問題を扱った。私たちが試みたのは、フロイトの幼児セクシュアリティ論を、子どもの性を探求する当時の科学的な試みのなかに位置づけることである。

そこでは、第一にフロイトの試みが、変質論に対抗しながら原初的な倒錯の普遍性と「発達論的な図式」を導入するものであったこと、とはいえそれはまた正常と異常の境界をより精緻に分析し操作する技術として把握できることを明らかにした。さらに第二に、フロイトが発達論的な図式を、家族の物語と接続することで、家族と国家の境界領域を占有しようとしたことを示した。これらの点は、精神分析における子どもが、いかにして「治療主義的な権力」の戦略地点となったのかを説明するものだと言えよう。しかし私たちはまた、「自体愛」の検討を通して、フロイトが「治療主義的な権力」に還元できない子どもの姿を捉えていたことを示していった。それは、自らに触れるマゾヒ

ズム的な子どもであり、自らに触れることで自己を絶えず自己破砕な経験へともたらそうとする子どもである。このような子どもは、フロイトが、シャルコーやベルネームの試みにおいて見られる想像力の作用領域を移動させることで見いだされた子どもであると言えるだろう。

自らに触れる子ども、自らを自己破砕にもたらそうとする子ども、もし仮にそうした子どもを「フロイト的な子ども」と呼べるのだとしたら、フロイトにおける発達論もまた、「発達論的な図式」に還元されないものとして把握できるはずである。このような視座に立って、フロイトの発達論を捉えなおそうとしたのが第4章である。そこで私たちが着目したのは、フロイトが、記憶を「装置」という観点から問題化し、また発達の時間性とは異なる「事後性」の時間を問題化したという点である。そこからフロイトとラカンの試みを対比し、装置はいかに作動するか、事後性の時間はいかに経過するのかを明らかにした。私たちはこれを「反発達論的な発達論」として捉え返すことができるだろう。おそらくフロイトの事後性とは、原場面が未規定な問いとして開かれる時間であると考えることができる。そうであるならば、「問いの開かれ」との関わりにおいて発達のプロセスを記述する試みを、「事後性の反発達論的な発達論」として提示することができるはずである。

とはいえ、このような構想をさらに展開するには、原場面がいかなる仕方で作用するのかを、視覚的なものやイメージといった観点から、さらにイメージと言語の関わりといった観点から問う必要があるだろう。イメージと言語の関係を問うこと、この課題に関しては第一部ですでに部分的に扱っていた。第三部では、この課題を中心に据えて検討を進めていった。その際に私たちは、第一部で明らかにしたように19世紀の末以降、実験科学の内に想像力の問題が侵入してきたということを出発点とした。すなわち、19世紀の末に問題化された想像力を取り扱うために、想像力の捉えなおしの試みがなされ、科学と思想の狭間の領域でイメージが問題化されていったのではないだろうか。このような仮説のもとで、フロイトの試みを、ユング、クラーゲス、ベンヤミンらの思想との連関の内で検討し、彼らにおいてイメージと想像力がいかに捉えられていったのか、そしてまたイメージと子どもの関係がどのように考えられていったのかを明らかにすることが目指された。

特に第5章では、フロイトのイメージ論を再構成することを試みた。その際に私たちが着目したのが、フロイトにおける夢と空想である。フロイトにとって夢と空想は、ともにイメージと言語の関係についての問題を提起するものであった。夢と空想に対するフロイトの取り組みはおそらく、イメージに対する内在的な対決として把握できる。フロイトはこうした対決を、夢と空想の複雑な絡まり合いを問題化することで、そしてまたユングとの関わりのなかで遂行していったのだと言える。フロイトにとって夢とは、イメージと文字の混合物であった。彼は、このような夢のイメージが言語へと架橋されるプロセスを、夢と空想の関係を論じることで問題化したのである。私たちはこのプロセスをフロイトにおける夢と空想の関係を解きほぐすことで示そうとした。またそこにおいて自らを自ら見るという内在的な自己構成の運動を、フロイトのイメージ論の根幹にあるものとして提示することができた。

だがフロイトのイメージに関する試みは断片的なものに過ぎない。第6章では、これを延長し拡張するものとしてベンヤミンの試みを取り上げた。そこでは、フロイトとベンヤミンの交差を、イメージと子どもという観点から検討していった。ベンヤミンの試みは、フロイトとユングの対決を足場として、クラーゲスのイメージ論と取り組むものであった。フロイトとベンヤミンはともにイメージと文字の混合に着目し、イメージの一元論的世界に被いと被われているものの区別を導入しようとした。そして彼らは、被いとしてのイメージを解読し、原場面や無意識的なイメージ空想を解読しようとする。その際の特権的な場が、子どもであり幼児期である。そこから私たちは、ベンヤミンにおける幼児期のイメージを色彩や空想という観点から示した。ベンヤミンにとって子どものイメージと空想は、色彩への自己の沈潜として把握できるものであり、そこからいかに言語へ、文字へと架橋されるかが問題となる。その上で私たちは、ベンヤミンの回想録とフロイトの症例報告をもとに、イメージと言語の複雑な絡まり合いをどのように記述できるかを検討した。そこにおいて示された子どもは、19世紀末から20世紀の前半にかけて、子どもの科学が形成されていく時代に見いだされる「フロイト的な子ども」と言えるのではないだろうか。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　渋谷亮　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授	藤川信夫
	副査　教授	Schwentker, Wolfgang
	副査　教授	老松克博
	副査　准教授	村上靖彦

論文審査の結果の要旨

本論文は、「子どもの科学」が形成され「治療主義的な権力」が広がりはじめた19世紀末という時代において、フロイトの試みがいかなる役割を担い、いかなる射程を有していたのかを検討しつつ、「フロイトにとっての子どもとは何だったのか」という問いを探究する試みである。その際、論者は、フロイトにおける子どもが、子ども、幼児期、幼児性の絡まり合いであり、子どもの問題は精神分析という営みの可能性それ自体と関わっているのではないかという仮説、さらにフロイトの試みが科学を志向すると同時に非科学的なものを絶えず内部に取り込むことによって成立したのではないかという仮説を立て、これらの仮説を検証すべく、科学史と思想史の方法論を併用して研究を進めている。

本論文は、「第一部　精神分析の誕生ー催眠術と精神分析」、「第二部　フロイトにおける子どもと発達ーフロイト的な子ども」、「第三部　精神分析とイメージという問題」の三部構成であり、それぞれの部が２つの章から成る。

第一部の「第１章　回帰する催眠術ーメスメル、シャルコー、ベルネーム」では、19世紀末に人間を対象とする科学の内に、ヒステリーと催眠術の問題を介して、人や物を結びつける力としての想像力（「接触、想像力、模倣」の力動）が侵入してきたことが示される。次いで「第２章　精神分析的な装置の誕生」では、フロイトが、この想像力の問題と取り組み、同時に「表象の連鎖」の構想によってそこから距離を取るべく、イメージと言語の間で作動する装置、そして、分析家と被分析者との間に瞬間的に立ち上がる幼児期を拠り所として精神分析を成立させたことが解明される。

第二部の「第３章　幼児セクシュアリティと自体愛」では、催眠術とともに当時の心理学、精神医学で盛んに議論されたセクシュアリティの問題が取り上げられる。この章では、第一に、変質論に対抗し原初的な倒錯の普遍性を示すべくフロイトによって導入された「発達論的な図式」が、同時に、正常と異常の境界をより精緻に分析し操作する技術としても把握でき、その意味で精神分析における子どもが、「治療主義的な権力」の戦略地点でもあったことが示される。しかし第二に、この章では、「自体愛」の検討を通して、フロイトが「発達論的な図式」ないし「治療主義的な権力」に還元できない子どもの姿を捉えていたことが示される。それは、自らに触れるマゾヒズム的な子どもであり、自らに触れることで自己を絶えず自己破砕的な経験へともたらそうとする子どもである。「第４章　事後性の反発達論的な発達論ー記憶する機会はいかに作動するのか」は、この種の「フロイト的な子ども」の観点から、フロイトの発達論を捉えなおそうとする試みである。ここで論者は、ラカンの試みとの対比を通じ、原場面が未規定な問いとして開かれる「事後性」の時間との関わりにおいて発達のプロセスを記述する点をフロイトの試みの特質と見なし、これを「事後性の反発達論的な発達論」と呼んでいる。

第三部では、この原場面の作用の仕方をより具体的に解明するため、再び第一部で示唆された想像力の問題と絡めつつ、イメージと言語の関係が論じられる。「第５章　イメージと言語のあいだでーフロイトにおける夢と空想」では、とりわけユングとの対比を通じて、フロイトが夢と空想の関係を論じる中で、イメージと文字の混合物としての夢のイメージが言語へと架橋されるプロセスを問題化していたことが示される。しかし、フロイトのイメージ論が断片的なものにすぎない。そこで、「第６章　幼児期のイメージ論ーフロイトとベンヤミン」では、フロイトの議論を延長・拡張すべく、フロイトとの交差の中で、彼と同様、子ども・幼児期におけるメージと文字の混合に着目し、被いとしてのイメージの解読、原場面や無意識的なイメージ空想の解読を試みたベンヤミンが取り上げられる。

以上の考察から、本論文は、思想史と科学史の方法論を併用する学際性という点で、また、とりわけ「事後性の反発達論的な発達論」をはじめとするフロイトの新たな思想的特徴を詳細に解明しえた点で非常に優れており、教育学に限らず他の研究諸領域にとっても非常に高い価値を示していると言える。

以上から、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。